

CURES

NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1992.11.20 No.25

巻頭言

経済改革下のロシア極東を訪ねて

村田 武

去る10月20日から22日の3日間、第1回環日本海経済交流実務セミナー(主催:〈財団法人〉北陸産業活性化センター)が、ウラジオストク市で開催され、わたしはセミナーの講師として、2年ぶりにロシア極東地域を訪ねる機会を得た。

I 激しいインフレ

去年の1月には40カペイカ、夏には2ルーブルだったガソリン(1リットル)が、今年の春には12.6ルーブル、そして現在は33ルーブル。この2年弱で、なんと80倍を越える激しいインフレに、ロシア極東は見舞われている。にわかには信じがたい数字だが、これが

現実なのだ。今年1月の価格自由化いらい、食料など生活物資はなんとか市場に出回るようになったものの、その価格はあれよあれよというまの高騰である。賃金水準の引き上げは、当然これには遅れている。生活難がとくに低所得層や年金生活者を襲っており、またこれまで、インフレの経験のないロシア社会にとってはなおさら、その精神的打撃は大きいようだ。極東地域でも、とくにウラジオストクは軍需依存が強く、消費財産業が弱かっただけに、いっそうインフレの直撃を受けており、日増しに市民の意識が暗くなっているように見受けられる。生活苦と経済犯罪の頻発のなかで、経済改革に悲観し、「強い政府」

- 巻頭言 村田 武
- CURES Report
「政治経済文化とは何か?」 ジェソーム レイモンド
- CURES Salon
「新疆ウイグル自治区(中国)訪問記」 橋本 哲哉
- Topic
「『韓日地方自治国際セミナー』に参加して」 佐々木 雅幸
- 地域経済文献情報

(それが軍事政権であろうと)を望む市民意識が強まっているように感じられるのである。

ロシア国家統計委員会の発表によれば、今年前半の工業生産は、昨年比17%を越える減少を記録したということで、独占的国营企業の分割を基礎に生産拡大と価格安定をめざそうという急進的経済改革にともなう混乱ばかりが目立つなかで、現状はまさに混迷の一語につきよう。



▲軍艦と客船が並ぶウラジオストク港

II 市場経済化に向けての知的支援

ウラジオストクで開催されたセミナーは、ロシアにおける市場経済化に向けての経済改革にたいする北陸地域からの知的支援活動として計画され、そのスタートラインでの取り組みとして準備されてきたものであった。本年5月に現地で開催されたアンケート調査結果にもとづいて、①貿易実務と外国為替入門、②日ロ合弁企業の進め方、③戦後日本の産業政策が、セミナーのテーマとして選択された。受講者のなかには、貿易会社や銀行の職員、さらに最近小企業を設立し、対日貿易を始めたいと考えている経営者が少なくなかったとみえて、貿易実務や合弁企業に関するつっこんだ質問が多く出されたのには、セミナー団としては嬉しい悲鳴であった。

私は「日本における戦後の産業政策」と題して、インフレーション克服、独占的寡占的産業組織の改革、軍事産業に偏った重化学工業の再編成、産業金融、税制など企業資本の蓄積のための政策の必要性といった諸点で、ロシアの現状と日本の戦後復興の類似点のあることを前提にして講義した。ドッジ・ラインというショック療法が、成功を保証されたものではなかったこと、ひいては現在のロシアの経済改革におけるショック療法がきわめ

て困難な道である点を受講者に理解してもらいたかったのである。

戦後日本における復興金融金庫や日本開発銀行の融資資金の調達方法、朝鮮特需の具体的内容、復興期の地方自治体財政の確立の方法など、戦後復興にたいする強い関心とならんで、とくに政府の貿易振興政策について具体的に聞きたいという質問が多く出された。

市場経済化に向けての知的支援について、ひとつだけ感じたことを述べておきたい。それは、市場経済をすべて民営化、いいかえれば「民活」にだけ活路を求め、公共部門や協同組合の意義を無視するような主張をロシアの人々にしてはならず、今後の支援においては、これらの部門の関係者も大きな役割を果たすべきではないかということである。

セミナーが現地でたいへんな好意をもって迎えられたことは、たいへん嬉しいことであった。私自身にとっても嬉しかったのは、昨年9月から1年間、当経済学部で留学生として世話した4人の極東総合大学東洋学部学生がセミナーに姿を見せ、うち2人のキリル君とオレク君が2日目、3日目のセミナーの通訳をりっぱに果たしてくれたことである。

(金沢大学経済学部教授)